女性の就業選択におけるジェンダー意識の影響

宮田理加

1. はじめに

1.1 研究に先立って

ジェンダー問題についてはここ数 10 年の動向としては，これまで男性が主体で構成されてきた社会や法律や教育などのあらゆる場面を女性の視点から問い直そうとする女性学の成果にはめざましいものがある．しかし実態としてはまだ男性優位社会がさまざまな場面で色濃く残っている．

1.2 先行研究の整理

女性のジェンダー意識は幼いころから，親や学校教育，地域の人々，マスメディアなどにより形成される．子どもの生活では家庭と学校生活が大半を占めていることから親と学校教育はジェンダー意識形成に大きく影響を与える．また父親よりも母親のほうが子どものジェンダー意識形成に強く影響を与える．

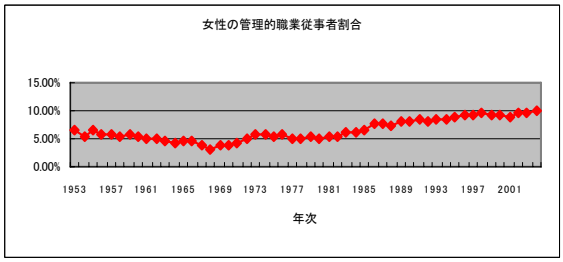
1.3 本研究の課題

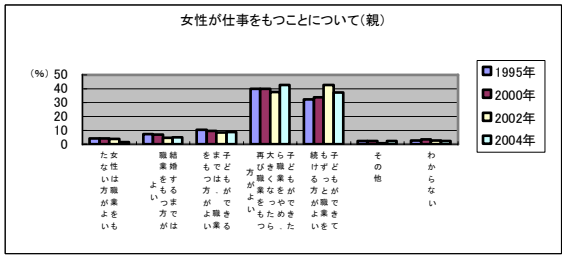
本研究では就業選択をする女性がジェンダー意識の縛りから開放されるためにはどうすればいいのかという問題に対して「企業の実態が変われば，親の意識が変わり，子どもの意識も変わるだろう」との仮説を提示する．

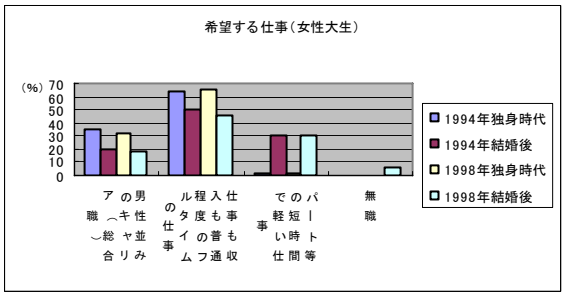
2. モデル･方法の説明

仮説の検証のため企業の実態（女性の管理的職業従事者割合の変化）と親の意識，就業選択をする女性の意識の変化が伴っているのか，総務省統計局の長期統計系列データ，男女共同参画に関する世論調査，女性歴史研究所大学生による意識調査をもとに比較し検証する．

3. 結果







①親の意識の変化は，企業の実態に伴っている．②企業の実態と就業選択をする女性の意識は伴っていない．

4. 考察

4.1 検証結果より

企業の実態を変えることで，親のジェンダー意識を変えることが，就業選択する女性のジェンダー意識を少なくする方法である．

4.2 今後の課題

ジェンダー意識形成に大きく影響を与える学校側の意識の変化についても検証することも取り組むべき意義のあることである．